慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦時期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編をめぐって
Sub Title	The wartime adaptations of Iwashita Shunsaku's The life of Tomishima Matsugoro
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.105, No.1 (2013. 12) ,p.95 (172)- 113 (154)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山下輝彦教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01050001-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦時期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編をめぐって

杉野　元子

はじめに

中国と日本の文学には人力車夫の登場してくる作品が数多くあるが、描かれた人力車夫の中で名前がよく知られ、もっとも親しまれているのは、中国では老舎の小説「駱駝祥子」の主人公祥子、日本では岩下俊作の小説「無法松の一生」の主人公富島松五郎であろう。まさに中国の「駱駝祥子」と日本の「無法松の一生」は、最後まで飽きさせない起伏に富んだ展開、その土地独特の方言、風物、伝統行事などを織り込んだ豊かな郷土色、くっきりとした輪郭をもつ個性派揃いの登場人物たち、そして何よりも一度聞いたら脳裏から離れることのない、絶妙このうえない主人公のあだ名によって、それぞれの国の人々の心を捉えてきた。

この日中両国を代表する車夫文学は、その受容のされ方に大きな違いがある。老舎は1936～37年にかけて、雑誌『宇宙風』に「駱駝祥子」を連載した。老舎の代表作「駱駝祥子」は20世紀中国文学の到達点を示す傑作で、中国はもとより、世界各国で翻訳され、大勢の読者を擁するが、「駱駝祥子」の小説から他の表現形態への移し換えは、あまり盛んとはいえない。「駱駝祥子」が最初に舞台化されたのは1957年で、北京人民芸術劇院によって話劇「駱駝祥子」が上演された。小説が発表されてから20年も後のことである。映画化は1982年、テレビドラマ化は1998年で舞台化よりもさらに遅れ、しかもそれぞれ一度のみである。

いっぽう「無法松の一生」は最初、「富島松五郎伝」という題名で、1939

年10月に『九州文学』に掲載された。「富島松五郎伝」は、雑誌に発表されて間もない時期から小説の枠を越え、さまざまな表現形態への読み換えが盛んにおこなわれるようになる。現在、「無法松の一生」という言葉を耳にして、多くの人が最初に思い浮かべるのは、村田英雄の「無法松の一生（度胸千両入り）」であろう。この歌は何人もの歌手によってカバーされている。この他に、映画や舞台の「無法松の一生」を思い浮かべる人も多いであろう。

筆者は以前、「富島松五郎伝」と「駱駝祥子」における車夫像について比較して論じたことがあるが[1]、本稿では、「富島松五郎伝」に焦点を絞り、「富島松五郎伝」が各種表現形態においてどのように改編されてきたのかを考察する。ただし、改編作品は多種多様に及ぶため、本稿では時期を戦時中に限定する。戦時期における「富島松五郎伝」改編問題については、大月隆寛『無法松の影』（毎日新聞社、1995年）などの先行研究があるが、これらの研究は森本薫脚色の舞台「富島松五郎伝」あるいは伊丹万作脚色の映画「無法松の一生」に集中し、それ以外の、たとえば新生新派や大衆演劇の舞台などについては見過ごされてきている。本稿は幅広く文献に当たることにより、戦時期の「富島松五郎伝」改編状況をつぶさに調べ、その全容にせまることを目的とする。

一、岩下俊作略歴と「富島松五郎伝」梗概

岩下俊作は1906年に福岡県企救群足立村（現在は北九州市小倉北区）に生まれた。小倉工業学校卒業後、1928年から八幡製鉄所に勤務。勤務のかたわら、詩や小説の執筆を続ける。「富島松五郎伝」は、1939年下半期・第10回直木賞候補、1940年上半期・第11回直木賞候補となる。その後も、「辰次と由松」で1940年下半期・第12回直木賞候補、「諦めとは言へど」で1941年上半期・第13回直木賞候補、「西域記」で1943年上半期・第17回直木賞候補となるが、いずれも受賞には至らなかった。1961年、八幡製鉄所を定年退職、1980年に死去する。

岩下俊作の父親は小倉で人力車の駐車場を経営していた。岩下は「少年

時代に俥の駐車場で俥夫とよく遊んでゐた。その頃私が見聞した話を集めて作つた小説が「富島松五郎」です」と書いている[2]。この小説の舞台は小倉である。酒とバクチが大好きで、荒くれ者で評判だった車夫富島松五郎（通称無法松）は、ふとしたことで陸軍大尉吉岡と知り合い、親しい間柄となるが、吉岡はまもなくして急逝する。松五郎は、車夫という身分をわきまえながらも、男手のなくなった吉岡家に出入りして、未亡人良子と幼い息子敏雄の生活の面倒をあれこれ見る。敏雄は幼いときには松五郎を慕っていたが、成長するにつれて距離を置くようになる。松五郎はずっと結婚せず、良子を秘かに想い続けていたが、死ぬ一年前、突然吉岡家を訪れ、涙を流しながら、「奥さん、俺は淋しゆうてつらい」と告白して、良子の手を握る。そして、吉岡家から飛び出し、二度と吉岡家を訪れることはなかった。その後、酒に溺れるようになり、48歳で野垂れ死にする。

二、戦時中の改編――小説

「富島松五郎伝」は作者自身によって一度改作がおこなわれている。「富島松五郎伝」は1939年4月、『改造』の懸賞小説に応募して選外佳作となった。同年10月、同作品を『九州文学』に発表して1939年下半期の直木賞候補、1940年6月、改作「富島松五郎伝」を『オール読物』に発表して1940年上半期の直木賞候補となるが、いずれも落選した。39年版は7章立て、40年版は5章立てになっている。吉川英治は、40年版について「かへつて味を損ねたかの心地がする」と書いている[3]。また中西由紀子はこの両作品を比較して、40年版では、「初出において佐藤春夫や室生犀星が評価した「ちぎれちぎれ」の「按排」、「折返し巻き返し」の描写、といった変化のある語りが、なだらかにつながり、一流れになっている」とし、「そのことにより、松五郎の「無法松」ぶりを構成する一つ一つの「事件」のインパクトが弱ま」ったと指摘している[4]。岩下俊作は1941年に作品集『富島松五郎伝』（小山書店）を刊行したが、この中には39年版が収められているし、その後の作品集でもつねに39年版が収められている。岩下本人も40年版の改作が改悪になってしまったことを自覚していたのであろう。

三、戦時中の改編 ── 映画

1943年、大映は映画「無法松の一生」を制作した。監督は稲垣浩、脚色は伊丹万作、主演は阪東妻三郎である。この映画は忠君愛国や戦意高揚を看板にした国策映画に倦んでいた大衆の間で好評を博した。したがってこの映画の後に作られた戦時中の演劇作品は、原作のタイトル「富島松五郎伝」ではなく、「無法松の一生」あるいは「無法松」というタイトルが使われるようになる。また岩下俊作自身も、1946年、「富島松五郎伝」を「無法松の一生」に改題し、「無法松の一生」他3編を収めた作品集『無法松の一生』（コバルト社）を出版した。

映画完成後、内務省警保局による検閲で、松五郎が未亡人良子の家を訪れて心の内を吐露するシーンなど10分43秒間のフィルムがカットされた。検閲室庶務係だった鳥羽幸信は、検閲室長が松五郎告白シーンを見て、「これは夜這いではないか、車引きが軍人の未亡人に恋とは言語道断である。このような非国民映画は絶対通さんぞ！」と激怒した、と回想している[5]。この映画は日本映画史上に名を残す傑作で、さまざまな角度からの先行研究が積み重ねられてきているので、本稿ではこれ以上の詳述はしない[6]。

なお映画化は戦後もおこなわれた。二回目の映画化は1958年で、制作は東宝、監督は稲垣浩、脚色は伊丹万作、主演は三船敏郎である。43年版は、戦時中は内務省警保局、戦後は連合国総司令部（GHQ）によって二重の検閲を受け、合計約18分間のフィルムがカットされたため、稲垣浩監督は、1958年にカラーでリメイクして、無念の想いを晴らした。この58年版はヴェネツィア国際映画祭で見事、金獅子賞（グランプリ）に輝いた。三回目の映画化は1963年で、制作は東映、監督は村山新治、脚色は伊藤大輔、主演は三國連太郎である。四回目の映画化は1965年で、制作は大映、監督は三隅研次、脚色は伊丹万作、主演は勝新太郎である。

四、戦時中の改編 ── 演劇

（1）文学座（1942年5月）

演劇の世界で小説「富島松五郎伝」改編の口火を切ったのは、1942年5月の文学座公演である。文学座幹事の岩田豊雄（獅子文六）は『オール読物』に掲載された「富島松五郎伝」に目をとめ、文学座の若い劇作家森本薫に脚色するように指示した。「富島松五郎伝」（演出：里見弴、主演：丸山定夫）は築地・国民新劇場で5月6日から21日まで20回上演されたが、大変な反響を呼び、座員配当が36円出るほどの大入りだった[7]。

森本薫版「富島松五郎伝」の場面割は次の通りである[8]。

第一幕　明治三十六年師走　小倉古船場町、木賃宿宇和島屋の階下／第二幕　明治三十七年五月初め　吉岡家の座敷／第三幕　明治三十九年七月中旬　祇園神社境内／第四幕　大正八年二月、節分の夜　吉岡家の居間／第五幕　前幕より二ヶ月後、四月末　第一場　宇和島屋の階下　第二場　前場の翌日

小説「富島松五郎伝」には、松五郎にまつわる逸話が寄せ集められているが、その主なものは次に示す7つである。

①若松警察の剣戟師範と喧嘩して、「無法松」のあだ名がついたこと
②結城重蔵親分と賭博して、その気っ風のよさをほめられたこと
③劇場常盤座で木戸をつかれたため、大暴れしたこと
④凱旋将軍奥大将をお前呼ばわりしたこと
⑤小倉工業高校運動会の徒競走に飛び入り参加して優勝したこと
⑥小倉中学と師範学校の喧嘩に割って入ったこと
⑦小倉祇園太鼓の日に勇壮なバチさばきで妙技を披露したこと

伊丹万作脚色「無法松の一生」は、原作に比較的忠実で、上述のエピソードの中で含まれていないのは、シナリオの事前検閲によって「完膚なき迄に削除せられた」エピソード②の賭博シーンのみである[9]。いっぽう森本薫脚色「富島松五郎伝」[10]は、②と⑤のエピソードがないが、他の5つのエピソードは、細部は若干原作と異なるものの、提示されている。提示の順番

は③①④⑦⑥である。映画と異なり、演劇は舞台装置や上演時間などの制約が多いため、実際に演じられるのは⑦のみで、それ以外は登場人物の台詞の中での言及に留まっている。

森本薫版は、この他にも原作にある話（熊本の高等学校の学生となった敏雄が民俗学に関心のある教師とともに帰省することなど）が削られたり、原作にない話（常磐座で喧嘩した熊吉と由松が三年ぶりに小倉に戻ってきて、松五郎に報復しようとすること、未亡人良子が裁縫を習いに来る近所の娘貞子と敏雄の結婚を望んでいることなど）が加わったりしているが、一番重要な異同は、敏雄と松五郎の関係である。原作では、敏雄は幼いときには松五郎を父親同然に慕っていたが、「次第に成長するにつれて、仮名文字さへ知らぬ野生そのまゝの松五郎の無智な愛は神経質な敏雄にとつて厭しくなつて[11]」きて、松五郎に冷たく当たる。しかし、森本薫版では、敏雄と松五郎は最後まで睦まじく、2人の間に亀裂が走ることはない。原作では、敏雄が距離的にも精神的にも離れていき、良子の家を訪れる機会も激減したことによって、松五郎は生き甲斐を失い、寂しさに耐えられなくなる。そしてついに良子に長年秘めていた恋慕の情を告白する。しかし森本薫版では、敏雄と松五郎の親密な関係が保たれたまま、良子への告白があるため、この告白シーンは唐突感が否めない。文学座の舞台を見た安部豊は、「原作の此小説は人情味の溢れた作品で、読む人をして引付けずには措かぬ位の面白さがあつたけれども、舞台での上演には演技に巧みな俳優があつたに拘らず、それほどの味感はなかつたように思ふ」と書いていて[12]、森本薫の脚色よりも岩下俊作の原作に高い評価を与えている。

（2）新生劇（1943年11月）

1943年11月20日から11月末まで、新京極・京都座で、1ワカナ・一郎劇団「純情縁しの糸」、2伊井三之助一座「町の警備隊」、3淡谷のり子・大山秀雄楽団「軽音楽」、4新生劇「無法松の一生」、5爆笑漫才陣「新作漫才」が演じられた[13]。「無法松の一生」は全五景で、脚色は尾崎倉三、演出は松井茂男であるが、上演台本・プログラムのいずれも未見のため、詳細は不明である。尾崎倉三（1898 ～ 1966年）は、1930年代から大衆演劇の

脚本・脚色を数多く手がけ、戦後は時代小説を20冊ほど出版した。

（３）川浪良太郎一座（1943年11月）

1943年11月21日から11月末まで、道頓堀・浪花座で、1川浪良太郎一座「無法松の一生」、2森川信一座に山茶花究ほか「おツ母さん」、3服部富子と田中次男楽団、4楽貴・世文ほか漫才陣、が演じられた[14]。川浪良太郎（1912～47年）は俳優、1938年に松竹下加茂に入社し、次々と時代劇映画の主役を演じるが、1942年戦時中の映画統制のため下加茂時代劇の制作が中止となり、1943年川浪良太郎一座を旗揚げした[15]。川浪良太郎一座「無法松の一生」については、上演台本・プログラムのいずれも未見のため、詳細は不明である。

映画「無法松の一生」が封切られたのは1943年10月28日であるが、それから一か月もたたないうちに、同じタイトルの演劇作品が作られて京都と大阪で上演された。新生劇と川浪良太郎一座の「無法松の一生」は、同時にかけられている演目が漫才や歌や爆笑劇などであることから、「無法松の一生」もかなり通俗化した大衆演劇である可能性が高い。

（４）厚生劇・関西大歌舞伎・東京新派大合同（1943年12月）

大阪・角座の1943年12月興行は、厚生劇[16]、関西大歌舞伎、東京新派合同の舞台で、昼は「忠孝一本」（中井泰孝作）、「勧進帳」、「艶容女舞衣」、「京鹿子娘道成寺」の四本立て、夜は「無法松」と「戻橋」の二本立て、12月14日からは昼夜演目が入れ替えられた。「無法松」の脚色は瀬川如皐[17]が担当し、松五郎を関西大歌舞伎の片岡我當、吉岡大尉夫人を厚生劇の瀧蓮子、酌婦おすみを東京新派の英太郎が演じた。上演台本は未見だが、「角座筋書」には、筋書、場面割、配役が書かれている。瀬川如皐版「無法松」の場面割は次の通りである[18]。

第一景　小倉市芝居小屋の舞台／第二景　松五郎俥宿／第三景　吉岡大尉の家／第四景　同十日後／第五景　同二十日後／第六景　小倉城外濠／第七景　松五郎の俥宿／（此間十年経過）／第八景　吉岡の家／第九景　若松亭／第十景　松五郎俥宿

瀬川如皐脚色「無法松」の特徴の一つは、冒頭に芝居小屋の場面が設定

され、そこで歌舞伎舞踊の演目「雨の五郎」が演じられることである。原作では、日清戦争の戦争劇「原田重吉玄武門の血戦」であったが、瀬川如皐脚色では歌舞伎俳優ならではの演技を披露できる演目を劇中劇に選んだ。もう一つの特徴は、原作にはない、松五郎に想いを寄せる酌婦おすみが登場することである。大月隆寛は「芸者という立場の〝もうひとりの女〟が、戦後的読み換えをくぐった後の、時期的には昭和三十年代以降の「無法松」のヴァージョンにはお約束のように登場して」くると書いているが[19]、〝もうひとりの女〟は戦時中の1943年に早くも出現していたのである。武智鉄二はこの舞台について、次のような厳しい評価を与えている。

> 「無法松」三時間余に亘る上演も、脚本の措辞の蕪雑、無法松の性格の割切つた単純化、阪妻の代用品としての我當の演技が外面的変貌への追求にのみ興味を奪はれて、性格の一貫性を欠いだ事等に基因して、唯の英太郎主演する新派悲劇に陥つたのは残念であつた。無法松がたつた一度泣いた挿話の如きも、実は松五郎の生活環境とその人間性の本源への標識として興味があるはずだのに、脚色（瀬川如皐）はそれを説諭に振り向け、我當の演技も全く無感動であつた。六條奈美子〔引用者注：役は吉岡大尉の姉〕だけが老練であつた。歌舞伎や新派の俳優に新作を求むべきではない[20]。

「英太郎主演する新派悲劇に陥つた」と書かれていることから、英太郎が演じた〝もうひとりの女〟酌婦おすみは単に登場するだけでなく、相当存在感のある重要な役だったことが想像される。

（５）苦楽座（1944年1～2月、11～12月）

苦楽座は1942年7月、薄田研二、徳川夢声、丸山定夫、八田尚之、藤原釜足の5人によって結成された劇団である。1944年1月25日に、丸の内・邦楽座で「無法松の一生」（脚色：森本薫、演出：村山知義）の幕が開き、2月7日まで14日間28回上演された。主演は前半が丸山定夫、後半が高山徳右衛門（薄田研二）である。同時に上演されたのは、川村花菱作・演出

「兵隊の宿」である。その後、苦楽座は移動演劇団を結成し、2月23日から28日まで茨城県内を巡演した。移動演劇団団長で、尾形重蔵役を演じた徳川夢声は、2月28日の日記の中で「今度の旅で苦楽座創立以来始めて薄謝というものを受けとつた。これが百円である」と書いている[21]。また徳川夢声は1957年に、邦楽座の公演について「ソロバンの上では大したこともなかつたが観客動員で大成功をおさめ」たと回想し、さらに「東京公演をおえてから十九年二月末小倉〔引用者注：茨城県の誤り〕にのりこみましたが、随分受けましたネ」と語っている[22]。

苦楽座は、1944年11月17日から12月21日まで、浜松を起点に、中部地方、中国地方を巡り、最後は小倉で12日間連続公演をおこなった。徳川夢声日記によると、「大入リ」、「超満員」の日もあれば、「大不入リ」、「四分ノ入リ」の日もあり、観客数は日によって大きなばらつきがあった。このことから、大月隆寛は「「無法松」は、当初から一律に民衆の評価を受けたわけではない。少なくとも、敗戦以前の段階においては、当時の国民のあらゆる層にあまねく大きな支持を受けた、と言えるだけの材料はない。後に定型として語られたような「国民的な」物語には、まだなっていないのだ」と指摘している[23]。しかし徳川夢声は巡業終了後の12月24日の日記で、この長期巡演について「苦楽座ノ債務ヲ償イ、同人各二千五百円ヲ分チ移動隊ニ三千円ノ基金提供ナド経済的大成功」と総括している[24]。また薄田研二は1960年にこの巡業を回想して、「旅興業の会計は私がやりましたが、明け暮れ、うるおいのない生活だっただけに何処でも大入りで、私は興業元から渡されるお札を腹巻きに入れて歩きましたが、忽ち身体がぐるぐる巻きになる程で、何十（ママ）カ月かの旅から家へ帰って腹巻きから札をとり出すと、札と一緒に肥えた虱がぞろぞろはい出す始末でした」と書いている[25]。徳川夢声の日記では「大不入リ」と記載されている日があるが、薄田研二の回想では「何処でも大入り」と書かれている。2人の記述には齟齬が生じているが、経済的に大成功をおさめたという点では一致している。このことから、苦楽座地方巡業は全体をならすとまずまずの観客数で、その結果、経済的大成功につながった、と考えるのが妥当であろう。また、大月

隆寛は、「敗戦以前の段階においては、当時の国民のあらゆる層にあまねく大きな支持を受けた、と言えるだけの材料はない」としているが、判断材料として、大映の映画及び文学座と苦楽座の舞台の他に、前述した新生劇、川浪良太郎一座、厚生劇・関西大歌舞伎・東京新派大合同の舞台、そして後述する新生新派、江味三郎劇団、女沢正劇団の舞台を新たに加えるならば、「無法松」の物語は敗戦以前の段階ですでに、幅広い層の人々に浸透し、大きな支持を集めていたと言えるであろう。

苦楽座は1945年1月に日本移動演劇連盟に加入して、「桜隊」と名乗り活動を続けるが、文学座や苦楽座の舞台で松五郎を演じた丸山定夫、大映の映画や苦学座の舞台で吉岡夫人を演じた園井恵子など9名は広島滞在中に被爆して全員死亡した。

（6）新生新派（1944年2月）

新生新派は明治期以来の新派劇の流れを汲む劇団で、1939年に花柳章太郎たちによって結成された。新生新派は1944年2月興行として、明治座で「無法松の一生」（脚色：川口松太郎、演出：佐々木孝丸、主演：柳永二郎）を上演した。この舞台では、吉岡未亡人を女形の花柳章太郎が演じている。同時に上演されたのは、里見弴作「よろしく」と泉鏡花作「婦系図」である。この2月公演は、「帝都随一という大入りだった」[26]。

川口松太郎脚色「無法松の一生」の場面割は次の通りである[27]。

序幕第一場　小倉の郊外（明治三十六年）／序幕第二場　吉岡家／二幕目第一場　俥宿（明治三十八年）／二幕目第二場　再び吉岡家／二幕目第三場　元の俥宿／大詰第一場　再び俥宿（九年後大正三年十一月）／大詰第二場　練兵場裏／大詰第三場　次の日の俥宿

川口松太郎脚色「無法松の一生」[28]は、原作の設定や筋が大幅に書き換えられていて、原作のエピソード7つのうち、川口松太郎版にあるのはたった1つ、エピソード⑥のみである。川口松太郎版の最大の特徴は、原作では松五郎と吉岡母子の関係を中心として話が展開するが、川口松太郎版では松五郎と車夫仲間の由松・虎吉の関係をめぐるもう一つの話が新たに加えられ、多くの頁が割かれている、ということである。

序幕第一場「小倉の郊外」は原作にはない設定で、小倉の郊外で、吉岡夫妻が桜の花見をしているところへ、松五郎と車夫仲間の由松・虎吉がやくざ者の集団に襲われて登場し、吉岡大尉が仲裁する。二幕目第一場「俥宿」の設定も原作と異なり、原作では松五郎は木賃宿に寝泊まりしていたが、川口松太郎版では、松五郎は由松と虎吉の3人で、5年契約で車1台と家を借りて住んでいる。そして二幕目第三場「元の俥宿」では、松五郎が契約満期まで2年を残して虎吉がお角と結婚して豆腐屋になろうとするのに反対したため、虎吉とお角が松五郎を縛り上げて短刀で脅し、松五郎は2人の熱意にほだされて結婚を認める、というドタバタが演じられる。大詰第三場「次の日の俥宿」では、松五郎の遺品から、吉岡母子名義の郵便通帳2通のほかに、原作にはない由松宛と虎吉宛の50円の入った紙包みも発見される。

松五郎と車夫仲間の関係が生き生きと描かれているのに対して、松五郎と吉岡母子の関係は無味乾燥で奥行きを感じさせない。成長した敏雄が松五郎に対して「坊ん坊んは止してくれよ」という場面があるものの、松五郎に対する信頼と親愛の情は揺らぐことがない。また松五郎の良子に対する告白シーンもない。松五郎は原作では吉岡母子との関係に悩み苦しみ、魂の抜け殻のようになって亡くなるが、川口松太郎版では敏雄の身を守るために病軀をおして小倉中学と師範学校の喧嘩に割って入り、その場であっけなく亡くなる。川口松太郎版「無法松の一生」は、1944年2月の上演のあと、再演されることがなかったということからも明らかなように、川口松太郎の大胆な換骨奪胎の試みは不成功に終わったと言えよう。戦後の新派公演では、森本薫あるいは中江良夫による脚色が使われている。

（7）江味三郎劇団（1944年1月～）

早稲田大学演劇博物館には「九州地区劇団占領期GHQ検閲台本」が所蔵されている[29]。連合国占領期、博多のCCD Ⅲ（第3地区民間検閲局）に保管されていた検閲台本で、総数は8000冊を超えるが、この中に「無法松の一生」というタイトルの台本が2冊ある。検閲申請者名によって、江味三郎申請版と酒井常男申請版とに区別する。この2冊には、戦時中の検閲

印が押されていることから、戦時中の検閲用に使用した台本を、終戦後、GHQによる検閲の際にそのまま使用したと思われる。この2冊はGHQの検閲ではいずれも「不許可」となった。

江味三郎申請版「無法松の一生」の表紙には、「原作　岩下俊作／脚色　織田泉三郎／時代劇　無法松の一生五場／表紙共六十一枚／戸畑市千防町九丁目一　江味三郎」と毛筆で書かれている。また「佐賀市佐賀劇場／宮崎興行部／大勘定　石井邦敏／電話九六五番」という青インクの判も押されている。二頁目には、戦時中の検閲印が二つ押されている。一つは福岡県による検閲合格印で、有効期間は1944年1月11日から1946年1月10日まで、もう一つは佐賀県による検閲合格印で、有効期間は1944年2月19日から1945年2月18日までである。

「九州地区劇団占領期GHQ検閲台本」の中には、申請者名に江味三郎と記載されているものが、「無法松の一生」を含めて71作品、申請者名は植田伝吉あるいは不明だが、劇団名に江味三郎劇団と記載されているものが7作品あることからも明らかなように、江味三郎劇団は戦時期から占領期にかけて精力的に活動していた。初代江味三郎の孫で二代目江味三郎の長男でもある里美たかしが座長を務める「劇団美山」のWebページによると、初代江味三郎は1903年に「江味劇団」を創立した[30]。また橋本正樹によると、大衆演劇の「第一期〔引用者注：1935～41年〕および第二期〔引用者注：1946～53年〕黄金時代、九州には七人衆と呼ばれ、桁はずれの人気で盛名を競いあった座長がい」て、その中の一人が初代江味三郎であった[31]。この劇団の所在地は小倉市に隣接する戸畑市[32]である。まさに「無法松」を演じるのにうってつけの地元劇団といえよう。

脚色の織田泉三郎は、福岡市の劇団「織田泉三郎一座」の座長である。詳細は不明だが、「九州地区劇団占領期GHQ検閲台本」では、「無法松の一生」を含めて8作品に脚色家あるいは原作者として名前が出ている。

江味三郎申請版「無法松の一生」の場面割は次の通りである。

一、小倉芝居小屋／二、吉岡小太郎宅／三、松五郎車宿／四、吉岡未亡人住居／五、若松亭の店

江味三郎申請版「無法松の一生」は、冒頭に歌舞伎狂言の演目「曾我の対面」が演じられること、〝もうひとりの女〟である酌婦おすみが登場することなどから、1943年12月に角座で上演された瀬川如皐脚色「無法松」を基にして、場面割を10から5に減らすなどの改編を加えたと思われる。原作「富島松五郎伝」のエピソード7つのうち、江味三郎申請版にあるのは3つのみで、提示の順番は③④①である。

この台本の最大の特徴は、戦況悪化、検閲強化の影響で、軍国主義的な色彩が前面に打ち出されていることである。未亡人となった良子は、敏夫〔筆者注：原作では敏雄だが、江味三郎申請版では敏夫〕を自分の手で「立派に夫の跡をつがせて軍人に育てあげたい」と願う。松五郎も「国の為に一人の軍人でも立派に作りあげることが御奉公」だと考え、敏夫に「ウーンと勉強して早く立派な軍人になれ」と励まし、「立派な軍人になる大切な玉子」だから悪い友達と付き合ってはいけないと注意する。そして松五郎は敏夫が士官学校に合格したと知ると、「士官学校をすましたら立派な軍人」だ、早く「軍人姿が見度い」と言う。このように江味三郎申請版では、「軍人」の二文字が何度も繰り返し出てくる。そして成長した敏雄（敏夫）は、原作では熊本の高等学校の学生、森本薫脚色版では帝大医学部の学生となるが、江味三郎申請版では東京の士官学校の学生となる。

映画「無法松の一生」は時局柄、軍人の未亡人の恋愛は戦地の将兵の士気を挫くと考えられたため、松五郎が良子の手を握って告白するシーンは検閲によってカットされたが、江味三郎申請版「無法松の一生」も、告白シーンはない。敏夫は成長にともない松五郎を蔑視し、松五郎の献身は代償目当てではないかとさえ疑うようになるが、松五郎は敏夫に対して、吉岡から臨終の折に「お前は変りもんだ、金で買へん変つた魂がある。私はこの魂が好きだ、この魂の真実（マコト）を以て坊を一人前の人間に仕立てる迄力になつてくれ」と頼まれたので、敏夫を「軍人にすることが一生の仕事だ、これが俺のまことだ。国の為にする仕事だ」と決意したこと、そして「世間並と変つた無法松の魂のまことを尽して来たつもり」であることを告げる。このように松五郎の吉岡母子に対する献身は、「魂のまこと」から発せ

られたものだと書かれているが、その一方で、松五郎は良子を慈母観音になぞらえ、「観音様に手を合す心で使へて来た」と言っていること、酌婦おすみから世帯をもとうと言われたときにきっぱりと断ったこと、などから松五郎の良子に対する思慕の情が、検閲の網の目をくぐり抜けて、さりげなく観客に伝わるようになっている。

（8）女沢正劇団（1944年5月～）

酒井常男申請版台本の表紙には、「原作　岩下俊作／演出　酒井常男／現代劇　無法松の一生　一幕五景　副本／表紙共□□〔引用者注：判読不能〕枚」と毛筆で書かれている。また「大分県日田郡大鶴村／大鶴劇場[33]酒井興行」という青インクの判が押され、その横にペンで「酒井常男」と書き添えられている。二枚目には、内務省の検閲印が押されていて、有効期間は1944年5月4日から1946年5月4日までである。以前は興行する都道府県が異なるたびに、その都道府県に脚本を提出して検閲を受けなければならなかった。しかし「決戦のさなかに国家の意図による方策を的確迅速に反映せしめ」、「健全な国民思想の保持を図るために」、1944年4月1日から脚本の提出先が内務省に一元化された[34]。したがって1944年1月と2月に検閲を受けた江味三郎申請版には福岡県と佐賀県の検閲印が押されているが、1944年5月に検閲を受けた酒井常男申請版には内務省の検閲印が押されているのである。

この台本には、脚色家の名前も劇団名も書かれていない。しかし、申請者酒井常男は女沢正（芸名：坂東政之助、本名：酒井マサ子）の夫であること、「九州地区劇団占領期GHQ検閲台本」には酒井常男が申請者となっている台本が37作品あり、その中の「無法松の一生」など5作品は劇団名が不明だが、残りの32作品はすべて女沢正劇団、女沢正一座と書かれていることから、「無法松の一生」も女沢正劇団が演じたと見なすことができよう。現在、大衆演劇一座のリーダー的存在として活躍している沢竜二[35]は、女沢正の四男である。沢竜二事務所のWebページには、「大正の末、新国劇の沢正こと沢田正二郎が大人気の折、日本の各地に女沢正を名乗る一座が続出して、事態に困惑した沢正は各座を調査させ、最も優秀な一人のみ

に女沢正の名乗りを許すことにした。その眼鏡に叶ったのが、現、女沢正こと坂東政之助、沢竜二の母である」と書かれている[36]。

酒井常男申請版「無法松の一生」の場面割は次の通りである。

第一景　小倉常盤座の横／第二景　吉岡大尉の家／第三景　俥の帳場／第四景　元の吉岡の家／第五景　元の俥の帳場

酒井常男申請版は江味三郎申請版の約三分の二の長さで、上演時間の大幅な短縮化が図られている。1943年10月1日から「興行時間短縮実施要領」によって演劇興行が4時間以内に制限されていたが、1944年4月1日には「決戦非常措置に基づく興行刷新実施要綱」が実施され、興行時間がさらに短い2時間半以内となった[37]。このことが、酒井常男申請版の長さに影響を与えたと思われる。原作7つのエピソードの中で、この台本にあるのは③と⑦のみである。舞台装置の簡便化も図られていて、③の劇場内乱闘事件は、劇場内ではなく劇場外に、⑦の太鼓をたたく場面は、祭りの場ではなく俥の帳場に設定されている。場面も第二景と第四景、第三景と第五景は重なっている。

1944年4月1日の「決戦非常措置に基づく興行刷新実施要綱」では、「日本精神の発揚、簡素剛健、明朗濶達、戦争遂行に必要な生活建設の促進等に資するように興行内容を刷新」することが求められ、また4月13日の「興行刷新要綱」では検閲が強化されるようになった[38]。このような厳しい締付けのもと、酒井常男申請版は、原作にある松五郎の未亡人良子に寄せる思慕の情も、成長した敏夫〔筆者注：原作では敏雄だが、酒井常男申請版では敏夫〕の松五郎に示す冷淡な態度もまったく描かれていない。松五郎は、「旦那もしお前が戦争に行ク様ナ事が有つたら俺等軍人になれねいかわりに留守中は松が守りますぜ」という吉岡大尉との約束を守って、未亡人良子と息子敏夫の面倒を見る。松五郎と吉岡母子の間を引き裂いたのは、原作では登場しない吉岡大尉の友人井上中佐の心ない言葉であった。松五郎は、井上が未亡人の家で、松五郎の親切は「金の無心」が目当てで、無法松という「異名を取る程の無頼漢ですから吉岡の家へ出入する資格の無い人間です」と話しているのを偶然耳にして、深い心の傷を負い、もとの荒

くれた生活に戻る。

酒井常男申請版も江味三郎申請版と同様に、決戦体制下における士気高揚が図られている。敏夫は軍国少年で、「学校からすぐ陸軍の学校へ進んでお父さんよりもつと〳〵出世する」ことを目指し、松五郎も「強く正しく生きてお父さんの名をけがさん様に立派な軍人になつておくれよ」と励ます。また原作では、松五郎が披露する太鼓の打法に、「流れ打ち」、「勇み駒」、「あばれ打ち」という名前がついている。これらは岩下俊作が自分で考えてひねり出した名前だが、高度な技を駆使し、鮮やかなバチさばきで太鼓を激しく打ち鳴らす松五郎の姿が眼前に浮かんでくる。ところが酒井常男申請版では、「勇み駒」と「あばれ打ち」が消え、「国家安全豊年打ち」という、時局を意識した不自然で奇妙な名前に置き換わっている。江味三郎申請版と酒井常男申請版の台本がGHQの検閲によっていずれも「不許可」となったのは、戦争を賛美し軍国主義を煽る内容だと判断されたからであろう。

おわりに

本稿では、1939年10月に活字化された小説「富島松五郎伝」が、終戦までの間に、どのような人の手によって、どのように改編されてきたのか、その足跡をできるだけ詳細にたどった。これまでの研究では、1940年6月に岩下俊作自身が改作した小説「富島松五郎伝」、1942年5月に文学座が上演した「富島松五郎伝」、1943年10月に封切られた映画「無法松の一生」、1944年1～2月、11～12月に苦楽座が上演した「無法松の一生」については言及がなされてきたが、本稿では、新たに、1943年11月に新生劇と川浪良太郎一座、1944年2月に新生新派、1944年1月以降に江味三郎劇団、1944年5月以降に女沢正劇団が「無法松の一生」を上演し、1943年12月に厚生劇・関西大歌舞伎・東京新派大合同が「無法松」を上演したことを明らかにした。「無法松」の物語は、小説が発表されてからわずか5年ほどの間に、新劇、新派劇、歌舞伎、大衆演劇などの実に幅広い分野の人々によって舞台化がおこなわれていたのである。

本稿ではさらに、上演台本やパンフレットの閲覧が可能な改編作品について、その内容に踏み込んで考察した。松五郎と吉岡の息子の関係は、原作と異なり最初から最後まで親子同然の親密さを保っている作品もあれば、途中で吉岡の息子の気持ちが変わり、松五郎に対して原作よりも露骨に冷たく当たる作品もあった。松五郎と吉岡未亡人の関係は、原作と同じく松五郎の告白シーンがある作品もあれば、原作と異なり恋愛感情をまったく差し挟まない作品もあった。また、松五郎をめぐる〝もうひとりの女〟が登場したり、松五郎と車夫仲間2人が共同で家と俥を借りているという設定で3人の友情が詳しく描かれていたり、軍国主義をあからさまに助長する内容が含まれていたりする作品があり、これまで知られていた森本薫脚色作品や伊丹万作脚色作品における原作との異同よりも、はるかに大きな異同が確認できることを指摘した。

小説「富島松五郎伝」は、1943年10月に封切られた映画「無法松の一生」が大ヒットし、全国各地の人々に「無法松」の物語が共有されるようになったことが契機となり、演劇の世界での改編が加速度的に拡がっていく。この小説は印象的なエピソードがポツポツ数珠つなぎに綴られているため、数珠の数を増減したり、順番を並べ替えたりするなどのアレンジがきく。改編者にとっては、腕を振るう余地が多くあり、改編の意欲を刺激する作品となっている。吉川英治はこの小説について、「お国焼の素朴なる陶工の手づくねに似てゐる。伊万里だの九谷焼だのといふ類の媚や巧緻や如才は持たないが、すこし難渋な字づらをしのんで、煎豆でも嚙むやうにぽつ〳〵読んでゆくと、なか〳〵味のある小説なのである[39]」という感想を寄せているが、小説「富島松五郎伝」は、伊万里や九谷焼ではなく、「お国焼の素朴なる陶工の手づくね」だったからこそ、さまざまな社会階層、さまざまな地域の人々の鑑賞眼に合わせて色を加えたり、形を変えたりといった加工を施しやすかったのであろう。

小説「富島松五郎伝」を映画や演劇作品に移し換える動きは、戦後になっても続く。さらにテレビドラマ、浪曲、漫画といった新しい表現形態への改編もおこなわれるようになる。戦時中、日本の文化的土壌にしっかりと

根を下ろした「無法松」が、戦後の時間の流れの中でどのような変容を遂げるのか、という戦後における改編の問題については、別稿を期したい。

注

1　杉野元子「駱駝祥子与無法松」張桂興編『老舎的精神世界与文化情懐』中国文史出版社、2013年12月刊行予定。

2　岩下俊作「舞台を見られぬ原作者から」『文学座』20号（パンフレット）、1942年5月、10頁。

3　吉川英治「推薦の辞」『オール読物』10巻5号、1940年5月、421頁。

4　中西由紀子「岩下俊作――「富島松五郎伝」と「無法松」のあいだ」『敍説』Ⅲ-01号、2007年8月、84～85頁。

5　鳥羽幸信「検閲時代」キネマ旬報社編『日本映画作品大鑑第7集』キネマ旬報社、1961年7月、26頁。

6　たとえば検閲問題に限っても、白井佳夫『受難の名作　映画無法松の一生　資料集』（映画「無法松の一生」完全上映運動事務局、出版年不明）、太田米男「映画『無法松の一生』再生」（Ⅰ）～（Ⅳ）（『芸術』17号～20号、1994～97年）などの研究がある。

7　『文学座五十年史』文学座、1987年、189頁。

8　「文学座五月公演」（チラシ）文学座事務所、1942年5月。

9　伊丹万作「「無法松の一生」余談」『映画評論』2巻1号、1942年1月、121頁。

10　1942年の文学座上演台本は未見のため、『森本薫全集　第三巻』（世界文学社、1953年）所収「富島松五郎伝」を用いた。

11　岩下俊作「富島松五郎伝」『第二期九州文学』13号、1939年10月、52頁。

12　安部豊「文学座公演を観る」『演芸画報』36巻6号、1942年6月、10頁。

13　国立劇場調査養成部調査資料課近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表　京都編　別巻』八木書店、2005年、100頁。

14　『松竹百年史　演劇資料』松竹株式会社、1996年、301頁。

15　「川浪良太郎」日外アソシエーツ「whoplus」〈http://www.nichigai.co.jp/database/who-plus.html〉（最終アクセス2013年10月1日）。

16　厚生劇は、関西新派、新旧合同劇をへて、1941年10月に創設された関西の劇団で、新派出身と歌舞伎出身の俳優が所属し、大衆劇を主とする。

17　瀬川如皐（1889～1957年）は四代目瀬川如皐の長男で、1913年『梅薫菅原後日譚』をもって劇作家となる。1943年、五代目瀬川如皐を襲名。

関西松竹文芸部に所属して歌舞伎や新派の作品を数多く手掛ける。

18 『筋書』（角座1943年12月公演）松竹株式会社大阪支店、1943年12月1日。

19 大月隆寛『無法松の影』毎日新聞社、1995年、251頁。

20 武智鉄二「関西劇信」『演劇界』2巻1号、1944年1月、21頁。

21 徳川夢声『夢声戦争日記　第三巻』中央公論社、1960年、45頁。

22 『無法松の一生』（パンフレット）劇団中芸、1957年3月、16頁。

23 大月隆寛、前掲書、229頁。

24 徳川夢声『夢声戦争日記　第四巻』中央公論社、1960年、117頁。

25 薄田研二『暗転　わが演劇自伝』東峰書院、1960年、226頁。

26 大笹吉雄『花顔の人』講談社、1991年、352頁。

27 『新生新派二月興行』（筋書）、1944年2月、11 ～ 12頁。

28 川口松太郎脚色「無法松の一生」上演台本は松竹大谷図書館に所蔵されている。

29 早稲田大学演劇博物館所蔵「九州地区劇団占領期GHQ検閲台本」については、山本浩幾「占領期九州地区検閲台本群―タイザー・コレクション―の再整理と公開」（『情報の科学と技術』57巻12号、2007年12月、567 ～ 574頁）が詳しい解説をおこなっている。

30 「劇団美山」〈http://gekidan-miyama.net/info〉（最終アクセス2013年10月1日）。

31 橋本正樹『あっぱれ！旅役者列伝』現代書館、2011年、209頁。

32 戸畑市は1963年に小倉市など4市と合併して北九州市となった。

33 橋本正樹『あっぱれ！旅役者列伝』（現代書館、2011年、32頁）によると、大鶴劇場は「沢竜二が小学二年〔引用者注：1942年ころ〕のとき」、両親が建てた「四百名を収容する、九州では中規模の芝居小屋」で、「六年後、大鶴劇場は隣家からの延焼で、自宅ともども全焼した」。

34 「興行　四月から一本建許可制」『朝日新聞』、1944年2月1日朝刊、3頁。

35 沢竜二自身も1986年1月に沢竜二事務所「みゅーじかる無法松の一生」（脚色：磯田啓二、演出：澤井信一郎・沢竜二）で松五郎を演じ、その後も再演を重ねている。

36 沢竜二事務所〈http://www.sawa-ryuji.jp/kouen/〉（最終アクセス2013年10月1日）。

37 馬場辰巳編「戦中演劇年表」『日本演劇学会紀要』19号、1981年12月、46 ～ 47頁。

38 同年表、47頁。

39 吉川英治、前掲文、421頁。